東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　42：197～210，2016

全学日本語プログラムにおける交換留学生のレベル配置の傾向について

工藤嘉名子・伊集院郁子

【キーワード】　全学日本語プログラム、交換留学生、レベル配置、交流協定校、教育の接続

1．はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下「JLC[1]」）の「全学日本語プログラム」は、本学に在籍する多様なカテゴリー（在籍身分）の留学生に広く開かれた日本語プログラムとして、2004年度に開設された。開設当時、受講生数は150名前後であったが、現在では200名を優に超え、250名に届く勢いである。特に、ここ数年は、本学が推進する「受け入れ留学生2倍」計画[2]のもと、学生交流協定校からの交換留学生（以下「ISEP学生」）が持続的に増え、受講生の半数を占める規模となっているのが特徴的である。

こうした受講生数の増加に対応すべく、全学日本語プログラムでは受講生数の多い科目を2クラス編成にするなどの措置をとってきたが、いまだに4割近い科目が受講定員数を超過した状態で授業を行っている。受講生数はISEP学生を中心に今後も増え続ける見込みで、中長期的な視野で科目設定やクラス編成を考えていく必要に迫られている。

科目設定やクラス編成を考える上で特に重要なのは、カテゴリー別の受講生数の予測値とレベル別の受講生数の予測値の二つである。国費留学生の場合、それぞれのカテゴリーでの受け入れ数がほぼ一定で、レベル配置や履修の傾向も比較的予測しやすい。一方、ISEP学生の場合、新規の受け入れ数については早い段階で情報を得ることができるが、レベル配置については「蓋を開けてみないとわからない」、つまり来日後のプレイスメントテストを受けるまではわからない

1　“Japanese Language Center for International Students”の略である。
2　2023年度の目標数値として、外国人留学生数（通年数）1216名が挙げられている。ちなみに、2013年度の実績数は698名である。（「東京外国語大学データ集2015-2016（平成27年度）」）

という状況が続いてきた。そのため、1クラス編成の科目で受講生数が定員を大幅に超過したり、2クラス編成の科目の受講生が定員を大きく下回ったりするといった事態が生じることが多い。全学日本語プログラムの受講生の半数を占めるISEP学生のレベル配置の予測が可能になれば、科目設定やクラス編成を検討する際の判断材料が増えるはずである。

そこで、本稿では、ISEP学生について、交流協定校別に過去のレベル配置状況を分析し、全学日本語プログラムにおけるレベル配置の傾向を探る。それによって、ISEP学生のレベル配置の予測性を高め、科目設定やクラス編成の最適化を含むプログラム運営の効率化を図る。

2. ISEP学生について

ISEP学生は、交流協定校からの交換留学生を受け入れる国際教育プログラム“ISEPTUFS”(International Student Exchange Program of Tokyo University of Foreign Studies)で1年間あるいは半期学ぶ留学生である。1998年10月から正式な受け入れを開始し、現在18年目を迎えている。20名の受け入れから始まった本プログラムは、2015年度には121名を受け入れるまでに拡大している。

その背景には、「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指すという国の政策がある。東京外国語大学においても、2014年度に文部科学省「スーパーグローバル大学創生支援」事業において、本学の構想「世界から日本へ、日本から世界へ－人と知の循環を支えるネットワーク中核大学－」が「グローバル化牽引型」として採択され、さらなる大学のグローバル化が推進されている。本事業計画の一つである「受け入れ留学生2倍」計画の実現に向け、海外大学の交流協定校も急激に増加している[3]。このような背景に鑑み、今後もISEP学生は増加していくことが予想される。

ISEP学生は、英語で行われる専門科目と、後述の全学日本語プログラムが提供する日本語科目を主に受講する。2012年度以降は、英語による専門科目の受講のみでプログラムを修了することが可能となっているが、ISEP学生のうち、2012年度79名、2013年度98名、2014年度125名が全学日本語プログラムを受講していることから、9割以上の学生が日本語力の向上を留学の目的の一つに据

[3] 2012年4月1日現在で81機関(42カ国・地域)のところ、2015年9月1日現在では113機関(50カ国・地域)と学生交流協定を結んでいる。

え、日本語を学んでいることがわかる。今後のISEP学生の増加は、全学日本語プログラムの定員増加に直結する問題であると言える。

3. 受講生数にみる全学日本語プログラムの動向

3.1 全学日本語プログラムの概要

全学日本語プログラムは、東京外国語大学に在籍する非正規の留学生を対象としたプログラムである。学生のカテゴリーは多岐にわたっており、カテゴリーによって、所属先や在籍期間、履修開始時期などが異なる。

2015年度現在、全学日本語プログラムを履修する学生のカテゴリーは、表1に示す7つである。このうち、⑥日韓共同理工系学部留学生と⑦委託留学生（拠点事業受入[4]）は、他大学からの委託を受け、全学日本語プログラムで受け入れている学生である。これら7カテゴリー以外にも、「その他」として、本学大学院のPCS（Peace & Conflict Studies）コース所属の学生やアジア・アフリカ言語文化研究所の研究生なども履修している。

表1　全学日本語プログラム履修生のカテゴリー

カテゴリー	所属先	在籍期間	履修開始時期
①国費研究留学生（予備教育）	JLC	6カ月	4月・10月
②国費教員研修留学生	JLC	1年6カ月	10月
③ISEP学生（交換留学生）	学部・大学院	6カ月・1年	4月・10月
④日本語・日本文化研修留学生	学部	1年	10月
⑤国費研究生・私費研究生	学部・大学院	1年～2年	4月・10月[5]
⑥日韓共同理工系学部留学生	他大学	6カ月	10月
⑦委託留学生（拠点事業受入）	他大学	学期単位	4月・10月

こうした多様な留学生がそれぞれのレベルやニーズに応じて履修できるよう、全学日本語プログラムでは、初級から超級までの8レベル設定に加え、集中・総合クラス、技能・トピック別クラス、漢字クラス、発音クラスといった目的別の

[4] 文部科学省の認定を受けた「日本語教育・教材開発・実践教育研修拠点事業」（平成24年度～28年度）の一環として、他大学から受け入れている留学生である。
[5] 国費研究生は4月と10月に入学するが、私費研究生は4月入学のみとなっている。

科目提供を行っている（表２参照）。なお、学生のレベルは、履修開始前に実施されるプレイスメントテストによって決まる。

表２　全学日本語プログラム開講レベル・科目[6]　※（　）内は単位数

レベル	集中・総合	技能・トピック別	漢字	発音
①初級　(100)[7]	集中（10）			
②初中級（200）	集中（10）		漢字（1）	
③中級１（300）	総合（5）	文法・読解・聴解・文章・口頭（各１）		
④中級２（400）	総合（5）	文法・読解・聴解・文章・口頭（各１）	漢字（1）	
⑤中上級（500）	総合（5）	文法・読解・聴解・文章・口頭（各１）		発音（1）
⑥上級１（600）	総合（3）	文法・読解・聴解・文章・口頭（各１）	漢字（1）	
⑦上級２（700）	総合（2）	文法・読解・聴解・文章・口頭（各１）	漢字（1）	
⑧超級　(800)		ライティング・時事・ドラマ・ビジネス（各1）		

３．２　全学日本語プログラム受講生数の推移

表３は、2006年度春学期から2015年度秋学期までの10カ年度における全学日本語プログラムの受講生数の推移をまとめたものである。「増加率」は、2006年度春学期を起点とした増加の割合（％）である。なお、各学期の受講生数は、新規の受講生と前学期からの継続生の合計である。

表３を見ると、2006年度から2013年度までの８カ年度においては、受講生数は増減を繰り返しており、増加率も変動が大きかったことがわかる。しかし、2014年度春学期を境に受講生数は大幅に増加し、2015年度秋学期は過去最高の236名に達している。前年度同期比、前学期比、増加率すべてにおいて、2014年度以降、増加傾向が持続していることがわかる。

---

[6] 表中の「文章」は「文章表現」、「口頭」は「口頭表現」、「ライティング」は「アカデミック・ライティング」、「時事」は「時事日本語」、「ビジネス」は「ビジネス日本語」を指す。

[7] 2015年度秋学期には試験的に「初級総合101（週５コマ）」を増設したが、来年度以降の開講は未定である。

表３　全学日本語プログラム受講生数の推移（2006 年度～ 2015 年度）

	06 春	06 秋	07 春	07 秋	08 春	08 秋	09 春	09 秋	10 春	10 秋
受講生数	154	139	173	165	161	166	192	182	206	185
前年度同期比	1.10	0.85	1.12	1.19	0.93	1.01	1.19	1.10	1.07	1.02
前学期比	0.94	0.90	1.24	0.95	0.98	1.03	1.16	0.95	1.13	0.90
増加率（%）	－	-9.7	12.3	7.1	4.5	7.8	24.7	18.2	33.8	20.1
	11 春	**11 秋**	**12 春**	**12 秋**	**13 春**	**13 秋**	**14 春**	**14 秋**	**15 春**	**15 秋**
受講生数	157	167	184	163	173	167	210	217	228	236
前年度同期比	0.76	0.90	1.17	0.98	0.94	1.02	1.21	1.30	1.09	1.09
前学期比	0.85	1.06	1.10	0.89	1.06	0.97	1.26	1.03	1.05	1.04
増加率（%）	1.9	8.4	19.5	5.8	12.3	8.4	36.4	40.9	48.1	53.2

3. 3　全学日本語プログラムにおける ISEP 学生数の推移

全学日本語プログラムの受講生数がここ２年で大幅に増えている背景には、前述の「受け入れ留学生２倍」計画のもと、交流協定校からの ISEP 学生の受け入れが増えていることがある。

表４は、2011 年度から 2015 年度までの５カ年度における、全学日本語プログラムの ISEP 学生数の推移を示したものである。「全体に占める割合（%）」は全学日本語プログラム受講生数全体に占める ISEP 学生の割合を指し、「増加率（%）」は 2011 年度春学期を起点とした増加の割合である。

表４を見ると、ISEP 学生が全体に占める割合は 50 %前後で推移しているものの、それ以外のデータ項目においては、2013 年度秋学期以降、ISEP 学生の増加傾向が持続していることがわかる。2015 年度秋学期には、過去最高の 123 名に上り、ここ５カ年度で 2011 年度春学期[8]の２倍以上の受講生数になっている。こうした ISEP 学生の増加傾向が受講生全体の増加傾向に直結していることは明らかである。

[8] 2011 年度春学期は、東日本大震災の影響で、ISEP 学生が大幅に減った学期であるが、2011 年度春学期の 57 名という数値は、10 年前の 2006 年度春学期の ISEP 学生数 59 名とほぼ同数である。したがって、表５の増加率は、2006 年度春学期を起点にした過去 10 年間の増加率とほぼ同じである。

表４　全学日本語プログラムにおける ISEP 学生数の推移（2011 年度～ 2015 年度）

	11 春	11 秋	12 春	12 秋	13 春	13 秋	14 春	14 秋	15 春	15 秋
ISEP 学生数	57	84	80	73	79	88	97	108	112	123
全体に占める割合（%）	36.3	50.3	43.5	44.8	45.7	52.7	46.2	49.8	49.1	52.1
前年度同期比	0.61	0.88	1.40	0.87	0.99	1.21	1.23	1.23	1.15	1.14
前学期比	0.60	1.47	0.95	0.91	1.08	1.11	1.10	1.11	1.04	1.10
増加率（%）	－	47.4	40.4	28.1	38.6	54.4	70.2	89.5	96.5	115.8

次に、ISEP 学生について、レベル別の受講生数を見てみると、表５に示す通り、ISEP 学生の受講レベルは 100 から 800 まで広く分布しており、400（中級２）レベルと 500（中上級）レベルに集中していること、ここ３カ年に 100（初級）レベル・200（初中級）レベル・800（超級）レベルで秋学期の受講生が増えていること以外は、はっきりとした傾向がつかめない。そのため、このデータからだけでは、各レベルの受講生数の予測が難しく、次の学期のクラス編成を考える際の強力な手がかりに欠ける。

表５　レベル別 ISEP 学生数の推移（2011 年度～ 2015 年度）

	11 春	11 秋	12 春	12 秋	13 春	13 秋	14 春	14 秋	15 春	15 秋
100（初級）	0	3	2	3	2	6	4	10	4	11
200（初中級）	0	8	5	6	2	8	5	8	8	11
300（中級１）	9	10	6	12	6	13	11	18	13	12
400（中級２）	9	20	18	21	18	27	22	19	24	30
500（中上級）	16	22	16	16	22	18	29	25	19	22
600（上級１）	16	10	17	8	17	8	17	15	24	15
700（上級２）	3	5	10	3	4	5	6	8	11	7
800（超級）	4	6	10	4	8	3	3	5	9	15

そこで、次節では、ISEP 学生のレベル配置の予測性を高め、開講科目やクラス編成の最適化を図るため、交流協定校別に ISEP 学生の過去のレベル配置状況を分析し、その傾向を明らかにする。

4. ISEP 学生のレベル配置

4. 1 分析対象データ

本稿では、2012 年度春学期から 2015 年度秋学期までの 4 カ年度、8 学期間に本学が受け入れた ISEP 学生計 480 名を対象に分析を行う。交流協定校数は計 87 大学で、地域別の内訳は、アジア 29 大学、アフリカ 3 大学、オセアニア 4 大学、中近東 3 大学、中南米 3 大学、北米 5 大学、ヨーロッパ 40 大学である。

ISEP 学生の場合、交流協定校や学生自身の事情によって、①春学期のみ受講、②春学期・秋学期受講、③秋学期のみ受講、④秋学期・翌春学期受講、と受講開始期、受講終了期などが異なる。また、学生によっては、全学日本語プログラムを全く受講しないという場合もある。ここでは、新規の学生が来日してすぐの学期にどのレベルを受講したか、その傾向をみる目的で、各学生の受講開始レベル[9]を分析対象とする。

4. 2 分析方法

全学日本語プログラムの実際の運営には交流協定校の大学名を知っておく必要があるが、本稿では交流協定校の大学名を匿名にする必要があると判断した。そこで、まず、それぞれの大学に表 6 の通り、大学コードを付与した。

表 6　交流協定校大学コード

地域	大学コード	機関数
アジア	AS-01 ～ AS-29	29 校
アフリカ	AF-01 ～ AF-03	3 校
オセアニア	OC-01 ～ OC-04	4 校
中近東	ME-01 ～ ME-03	3 校
中南米	SA-01 ～ SA-03	3 校
北米	NA-01 ～ NA-05	5 校
ヨーロッパ	EU-01 ～ EU-40	40 校
		計 87 校

[9] ここでの「受講開始レベル」は、プレイスメントテストで配置されたレベルではなく、当該学期に実際に受講したレベルを指す。受講レベルはプレイスメントテストの結果に準じるが、学生の希望により、面談を経てテスト結果と異なるレベルを受講する場合もある。また、分析には全学日本語プログラムを受講しなかった学生も含める。

次に、交流協定校87校について、下記の基準にしたがい、受講開始期のレベル配置の一致度を特定した。なお、受講生数3名未満の大学については、レベル配置の傾向分析が不可能であるとした。

【一致度分析の基準】

◎：一致度高い
・特定の1レベルに集中しており、2番目に多いレベルとの差が2名以上である。
例）AS-05：600(2)、800(8)、受講せず(1)
NA-04：400(1)、500(3)、600(1)、受講せず(1)

○：一致度やや高い
・複数のレベルに分散しているものの、特定の2レベルに集中する傾向が見られる。
例）ME-02：300(1)、400(3)、500(2)、600(1)
EU-10：200(4)、300(1)、400(5)、500(1)

△：一致度低い
・3レベル以上に分散しており、レベル配置の傾向が特定できない。
例）AS-19：100(1)、200(1)、300(1)、400(1)、500(1)、600(2)、700(1)
OC-04：200(1)、400(1)、500(1)

×：分析不可能
・受講生数が3名未満で、傾向が分析できない。

4.3 分析結果

交流協定校87校について、レベル配置の一致度を分析した結果、「一致度高い」とされた大学が25校(28.7％)、「一致度やや高い」が16校(18.4％)、「一致度低い」が23校(26.4％)、「分析不可能」が23校(26.4％)であった。「一致度高い」と「一致度やや高い」を合わせると、41校(47.1％)にレベル配置の傾向が見られた。レベル配置の傾向が見られた41校は表7-1、表7-2の通りである。表中の「◎」は「一致度高い」、「○」は「一致度やや高い」、「レベル」は「一致度の高いレベル」である。また、「学期」は「受講開始学期」を指すが、「春」「秋」の両方となっている場合は、春学期にも秋学期にも新規のISEP学生が受講を開始したという意味である。

表 7-1　レベル配置の一致度が高い大学 25 校

一致度	大学コード	レベル	受講状況の詳細　(　)は受講生数	学期	
◎	AS-07	100（初級）	100（4）、300（1）		秋
◎	AS-27	100（初級）	100（3）		秋
◎	SA-01	100（初級）	100（3）、300（1）	春	秋
◎	EU-31	100（初級）	100（4）、400（1）		秋
◎	EU-04	200（初中級）	200（5）、300（3）、400（2）、受講せず（1）		秋
◎	EU-19	200（初中級）	100（2）、200（7）、300（2）、400（1）	春	秋
◎	EU-23	200（初中級）	100（1）、200（3）	春	秋
◎	EU-28	200（初中級）	100（1）、200（4）、300（2）		秋
◎	AS-08	300（中級 1）	300（6）、400（4）、500（1）、800（1）	春	秋
◎	AS-24	400（中級 2）	100（1）、300（1）、400（3）		秋
◎	ME-03	400（中級 2）	300（1）、400（4）、500（1）		秋
◎	EU-03	400（中級 2）	300（5）、400（7）、500（1）		秋
◎	EU-12	400（中級 2）	300（2）、400（4）、500（2）		秋
◎	EU-25	400（中級 2）	400（5）、600（2）、800（1）	春	秋
◎	EU-40	400（中級 2）	400（6）、600（1）		秋
◎	ME-01	500（中上級）	400（1）、500（4）		秋
◎	NA-04	500（中上級）	400（1）、500（3）、600（1）、受講せず（1）	春	秋
◎	EU-06	500（中上級）	400（2）、500（7）、700（1）		秋
◎	EU-11	500（中上級）	400（1）、500（4）、700（1）、受講せず（1）		秋
◎	EU-39	500（中上級）	400（1）、500（2）、600（4）、700（2）		秋
◎	AS-11	600（上級 1）	500（3）、600（5）、700（3）、800（1）		秋
◎	AS-15	600（上級 1）	600（3）、800（1）	春	
◎	AS-23	600（上級 1）	500（2）、600（5）、800（1）		秋
◎	AS-05	800（超級）	600（2）、800（8）、受講せず（1）	春	
◎	AS-18	受講せず	600（3）、700（1）、800（2）、受講せず（18）	春	

表 7-2　レベル配置の一致度がやや高い大学 16 校

一致度	大学コード	レベル	受講状況の詳細　（　）は受講生数	学期	
○	AS-28	100（初級）・400（中級 2）	100（2）、400（2）、500（1）		秋
○	NA-01	200（初中級）・300（中級 1）	200（3）、300（2）、400（1）		秋
○	EU-15	200（初中級）・300（中級 1）	200（2）、300（2）、400（1）	春	秋
○	EU-10	200（初中級）・400（中級 2）	200（4）、300（1）、400（5）、500（1）	春	
○	OC-01	300（中級 1）・400（中級 2）	300（2）、400（2）、700（1）		秋
○	EU-08	300（中級 1）・400（中級 2）	300（3）、400（4）、500（1）	春	秋
○	EU-16	300（中級 1）・400（中級 2）	300（4）、400（3）、500（1）		秋
○	AS-29	400（中級 2）・500（中上級）	300（2）、400（4）、500（3）		秋
○	AF-01	400（中級 2）・500（中上級）	400（3）、500（4）		秋
○	ME-02	400（中級 2）・500（中上級）	300（1）、400（3）、500（2）、600（1）		秋
○	EU-05	400（中級 2）・500（中上級）	400（3）、500（3）、600（1）		秋
○	EU-20	400（中級 2）・500（中上級）	300（1）、400（3）、500（2）		秋
○	EU-21	400（中級 2）・500（中上級）	100（1）、200（1）、400（2）、500（3）	春	秋
○	AS-14	400（中級 2）・700（中上級）	400（2）、700（2）	春	
○	EU-30	500（中上級）・600（上級 1）	500（4）、600（3）		秋
○	AS-13	600（上級 1）・800（超級）	500（1）、600（4）、700（2）、800（3）	春	秋

まず、表 7-1 でレベル配置の一致度が高い大学をレベル別に見ると、100（初級）が 4 校、200（初中級）が 4 校、300（中級 1）が 1 校、400（中級 2）が 6 校、500（中上級）が 5 校、600（上級 1）が 3 校、800（超級）が 1 校、「受講せず」が 1 校となっており、100・200・400・500 レベルに一致度の高い大学が集中している。また、秋に来日

して秋学期に受講を開始する大学が25校中22校と圧倒的に多い。

次に、表7-2の「レベル配置の一致度がやや高い大学」を見ると、延べ数で、100（初級）が1校、200（初中級）が3校、300（中級1）が5校、400（中級2）が12校、500（中上級）が7校、600（上級1）が2校、700（上級2）が1校、800（超級）が1校となっている。ここでも400･500レベルの一致度が高くなっていることがわかる。また、「200・300」「300・400」「400・500」のように、連続する2レベルに集中している大学が16大学中12大学となっている。なお、表7-1の結果と同様に、秋学期に受講を開始する大学が16校中14校と多い。

以上の結果を合わせると、400（中級2）を受講する可能性の高い協定校が延べ18校と最も多く、次いで500（中上級）が12校、200（初中級）7校、300（中級1）6校の順となる。その大半が秋学期に受講を開始することから、秋学期については、交流協定校によって新規生の受講レベルを特定できる可能性が高いと言える。

5. ISEP学生のレベル配置の予測

表5「レベル別ISEP学生数の推移」で見た通り、ISEP学生の受講傾向として、秋学期の100（初級）・200（初中級）・800（超級）レベルの受講生が増えていること、400（中級2）・500（中上級）レベルに受講生が集中していることの2点が挙げられる。全学日本語プログラムでは、将来的にこれら5レベルのクラス数を増設する可能性を検討しているところである。本分析によって、これら5レベルに配置される可能性の高い協定校（「レベル配置の一致度が高い大学」）が20校特定できたことは、今後の科目設定・クラス編成を検討する上で、有益な判断材料となると言えよう。

また、「レベル配置の一致度がやや高い大学」16校中12校について、連続する2レベルに受講生が集中しているという結果から、2レベル程度の幅を想定して受講生数を予測することも可能になると思われる。

これまで「蓋を開けてみないとわからない」とされてきた新規のISEP学生のレベル配置であるが、交流協定校87校中、47.1％に相当する41校についてレベル配置をある程度予測することができるという分析結果は、プログラム運営にとって、非常に有益である。科目設定やクラス編成を検討する際にはもちろんのこと、プレイスメントテストで配置されたレベルから別のレベルに移動したいという学生について、適正なレベルを判断する際にも有用なデータとなるであろう。

さらに、現時点では受講生数が少なく「分析不可能」とされた23校中12校は、

2012年以降に交流協定が締結された新規の協定校であることから、今後これらの大学からの受け入れ数が増えると、受講レベルの傾向が見えてくる可能性もある。レベル配置の予測性を高めるためにも、データの蓄積と分析を継続していく必要があるであろう。

6. おわりに

本稿では、SGU採択と「受け入れ留学生2倍」計画を背景に増え続けている交換留学生（ISEP学生）について、全学日本語プログラムにおける過去4カ年度の受講レベルの分析を行い、レベル配置の傾向を分析した。その結果、交流協定校の半数近くは受講レベルに高い一致度またはやや高い一致度がみられた。この分析結果は、今後、全学日本語プログラムでの受講レベルおよび受講生数を予測する上で、非常に有益である。また、過去2カ年度の増加傾向と「受け入れ留学生2倍」計画における各年度の受け入れ留学生数の数値目標から、中長期的に受講生数を予測していくことも可能であると思われる。

本稿では、ISEP学生について、量的な側面から受講の傾向を明らかにするにとどまった。しかし、交流協定校との教育の接続という質的な面からも受講傾向を分析していく必要があるであろう。今回の分析で受講レベルの一致度が「高い」「やや高い」とされた41校について、交流協定校での留学前・留学後の日本語教育事情を探ることで、教育の接続のあり方が見えてくる可能性が高い。今後、本学の国際日本研究センターで実施している一連の日本教育事情調査（谷口・坂本2013、谷口・望月2014、小林・鈴木2015など）の結果やISEP学生への聞き取り調査などから、全学日本語プログラムと協定校との教育の接続について明らかにしていきたい。

参考文献

小林幸江・鈴木美加（2015）「『国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査』データベース中間報告Ⅲ―学部教育における日本語教育の教材と教育上の問題―」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第5号，95-116.

谷口龍子・坂本惠（2013）「『国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査』データベース中間報告Ⅰ―欧米型（日本研究の中の日本語教育）とアジア型（日本語教育から日本研究へ）―」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研

究』第 3 号，109-120.
谷口龍子・望月圭子（2014）「『国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査』データベース中間報告Ⅱ―日本研究に関連した海外の大学院教育―」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第 4 号，147-161.
東京外国語大学（2015）「ISEPTUFS 履修案内 2015-2016 年秋・冬学期」
東京外国語大学（2015）「東京外国語大学データ集 2015-2016（平成 27 年度）」
東京外国語大学「学生交流協定校一覧」http://www.tufs.ac.jp/studyabroad/schools/（2015 年 11 月 20 日）

The Tendency of the Level Placement of ISEPTUFS Students in JLPTUFS

KUDO Kanako, IJUIN Ikuko

The Japanese Language Program of Tokyo University of Foreign Studies (JLPTUFS) has provided various categories of international students with the opportunities to study Japanese over the last twelve years since 2004. In the past couple of years, the number of students on the International Student Exchange Program of Tokyo University of Foreign Studies (ISEP students) has remarkably increased, in response to the "Doubling International Students Plan" promoted by TUFS. In accordance with this rapid and continuous increase of ISEP students, JLPTUFS has had difficulty in predicting the class size of each proficiency level, from elementary to upper advanced, and designing the class schedule of the program. If the tendency of the level placement of ISEP students, who hold a majority in JLPTUFS, is grasped, it will be of great help for the program to optimize the class schedule.

For the purpose of investigating the tendency of the level placement of ISEP students, we analyzed the levels that 480 students from 87 partner universities of TUFS were placed in the first term of JLPTUFS in the past four academic years between 2012 and 2015. As the result of analyzing the distribution of students' levels by university, we identified 25 universities (28.7% of partner universities) whose students are concentrated in one specific level such as upper intermediate or pre-advanced, and another 16 universities (18.4%) concentrated in two specific levels. This means that the level(s) of students from these 41 universities (47.1%) are considered to be highly predictable before their arrival.

The tendency of the level placement of ISEP students obtained from this study will be very beneficial for JLPTUFS not only to optimize the class schedule at hand, but also to design the program from a long-term perspective.